



人間文化研究機構 ネットワーク型基幹研究プロジェクト
地域研究推進事業 南アジア地域研究



ISSN 2432-437X

FINDAS

The Center for South Asian Studies,
Tokyo University of Foreign Studies
東京外国語大学 南アジア研究センター

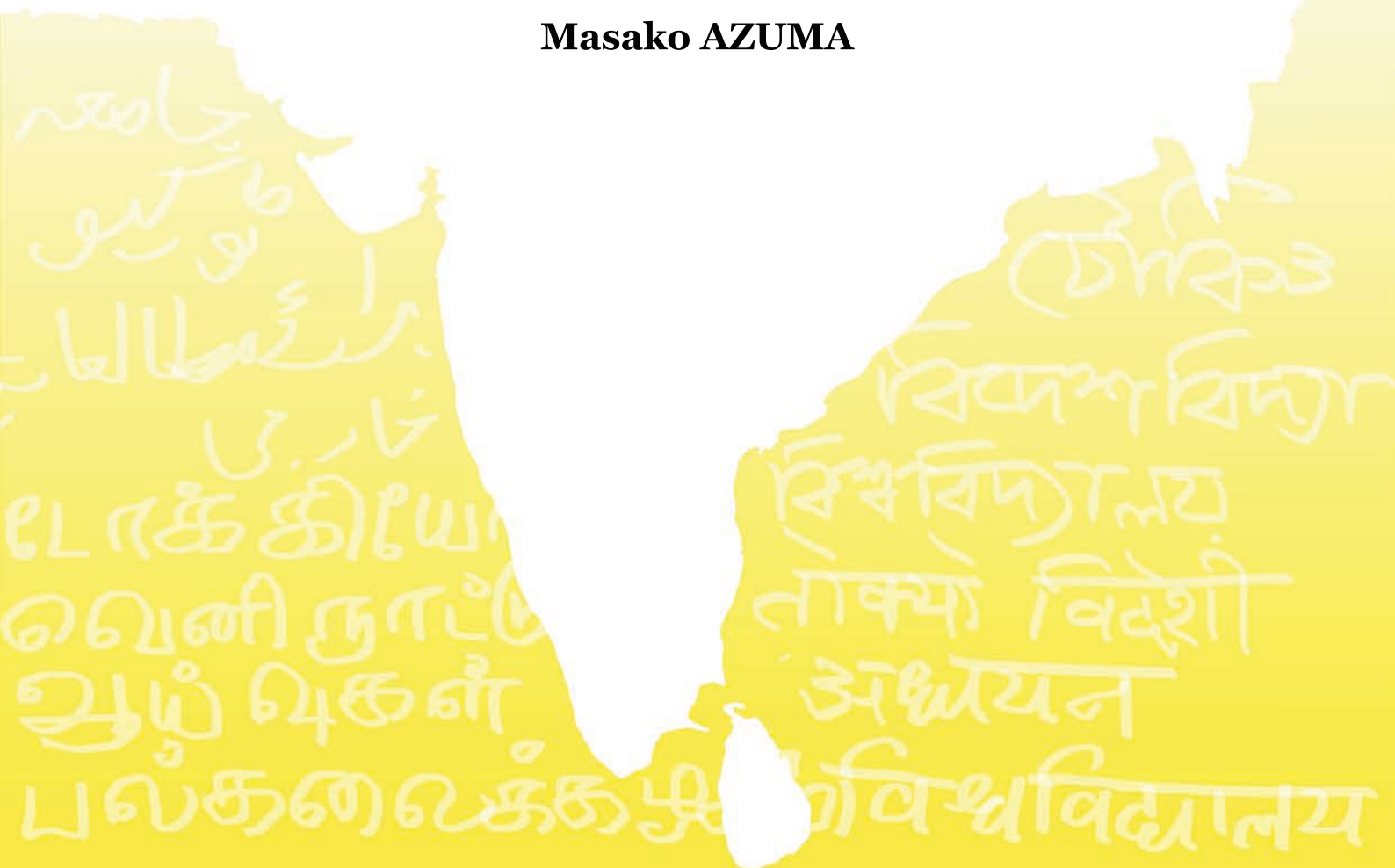
東京外国語大学南アジア研究リサーチペーパー 7

多文化社会における移民の文化実践とモビリティ
— トロント近郊パンジャーブ移民の事例より —

東 聖子

**Mobilities and cultural practices of Punjabi migrants
in the Greater Toronto Area**

Masako AZUMA



東京外国語大学拠点・南アジア研究センター

Center for South Asian Studies, Tokyo University of Foreign Studies (FINDAS)

研究テーマ「南アジアにおける文学・社会運動・ジェンダー」
Literature, Social Movements, and Gender Issues in South Asia

本拠点は、現代南アジアの構造変動に関する理解を、重層化・多元化・輻輳化する社会運動の歴史・政治・社会学的分析と文学分析、およびジェンダー視角を軸として深めることを目的とする。さらに、対象研究領域に関して、すでに東京外国語大学が所蔵する文献・史資料群を充実させることを系統的、意識的に追及し、国内における文献拠点となることをめざす。

本拠点の第1期（2010～2014年度）の研究活動を通じて、経済自由化・グローバル化にともなう現代インドにおける構造変動が、個人、家族、コミュニティ・レベルの人々の意識、ジェンダー関係に劇的な変容をもたらしたこと、アイデンティティの複合性と可変性がさらに加速化していること、ならびに、インドを特徴づけている活性化された民主政治が、それまで社会的周縁に位置づけられてきた諸集団の積極的な異議申し立てなしには理解できないという事実が明らかになった。第2期（2015～2019年度）では、社会運動の諸相をとくに、人的紐帯の変化、および、それらを支える情動や感性の側面に焦点をあてること、対象地域をさらに、南アジア地域に拡大するとともに、中国・東南アジア・イスラーム地域などの他地域との比較研究を意識的に組織化し、理論化を主導することに重点的に取り組む。

東京外国語大学は、ウルドゥー語・ヒンディー語・ベンガル語を中心に南アジアの諸言語の教育、および南アジア地域研究に関して明治期以来の長い歴史を有し、世界的に活躍する高度職業人ならびに日本における南アジア研究の中核を担う研究者を輩出してきた実績がある。また、国内有数の南アジア諸語文献・南アジア関連の文献・史料の所蔵を誇る。さらには、海外の南アジア研究者との学術交流にも長い伝統がある。こうした特長を最大限に生かしつつ、本拠点はさらに国内外の南アジア研究者のネットワークのハブとして共同研究を組織するとともに、若手研究者の育成を重点的に行い、南アジア地域研究のレベルを明示的に高めることをめざす。

研究ユニット1「輻輳する社会運動における実践と理論」

研究ユニット2「社会変動と文学」

東京外国語大学南アジア研究リサーチペーパー 7

多文化社会における移民の文化実践とモビリティ
— トロント近郊パンジャブ移民の事例より —

東 聖 子

多文化社会における移民の文化実践とモビリティ

——トロント近郊パンジャブ移民の事例より

東 聖子*

Mobilities and cultural practices of Punjabi migrants in the Greater Toronto Area

Masako AZUMA*

Abstract

This paper examines the relevancies between the mobilities of migrants and their cultural practices through the research on Indian Punjabi migrants in the Greater Toronto Area (GTA), Canada. Focus is placed on a key person in the community through an explanation of his social and geographical mobilities. Another point of mobility, that is, the mutual influence between a network of migrants and their moves, is discussed in this paper. The cultural practices of Punjabi migrants in the GTA prepare their tie of co-presence through regular meetings. Their network, based on the tie, supports migrants' mobility through their attendance at the venue where the meetings are held. Through the network they find the support that is necessary for their mobility. Conversely their cultural practices and their network cannot be achieved unless they move to meet at the venue. This paper also attempts to explain how the mobilities of migrants and their cultural practices can be understood in the context of a multicultural society. Previous studies tended to address only one perspective despite the fact that both perspectives on mobilities and a multicultural society are significant in migration studies.

1 問題の所在

1-1 移動の頻繁化とモビリティへの着目

近年の移民研究においては、人の移動の広域化、高速化、環流化と、それに伴う移住者の多様性が現代移民の特徴として説明されている [森本 2008; 森本・森茂 2018]。人の移動は出身地と移住先の 2 地点間の移動に限られず、多くの場所における循環移動が存在することから、それらの場所を複数調査地として研究対象とする視座や、そこにみられる様々な次元の移動について指摘されている [ハージ 2007]。このような人々の移動をめぐる、今日の移民研究においては、移動と場所の関係を捉え直す試み [伊豫谷 2007; 2013] や、移動し続ける移民へ着目 [栗田 2018] がみられる。伊豫谷 [2013] は、所与のものとして設定および固定された場所から移動をとらえるのではなく、人の移動から場所をとらえることの意義を提唱

* 近畿大学国際学部国際学科 講師

する。栗田は、移民社会のなかで移民の集まる場である結節点に着目した研究の成果を認めつつも、従来の結節点に着目する研究では不十分な側面があることを指摘し、移民が「滞在している様態」ではなく、移民が「動いている様態」に着目する [栗田 2018:3-4]。

これらの研究にみられる人の移動や動態への照射は、幾つもの次元におけるグローバル化 [Appadurai1996] を背景としたものであるとともに、アーリ [2015] が論じているように、社会における移動のあり方=モビリティ(移動性)が関連していると考えられる。ハージ [2007] は、これまでの移民研究においては、国境を越えるというトランスナショナルな移動が、日常における様々な移動を差し置いて、「重要な移動」とみなされてきたと批判する。さらに、「重要な移動」とみなされてきた物理的移動と、人間の可能性と密接に結びつく「社会的上昇移動」に表されるような存在論的移動の関連を考えることが、移住を理解するうえで重要だと述べている [ハージ 2007]。これらの指摘は、私たちの日常生活が、様々なモビリティの複合によって成立している [Elliott and Urry2010] ことや、社会的な上昇移動が「より良い生活」を送るための移民の動機となることを考えれば、妥当なものと考えられる。このように、今日の移民研究には移動やモビリティへの注視がみられるが、伊豫谷 [2013:15] が指摘するように、従来の場所への関心が薄れていいというわけではない。

1-2 場所を起点とする移民研究

一方、場所を起点とした移民に関わる研究として、多文化共生や多文化社会研究が挙げられるだろう。多文化主義の実践や移民の社会統合が試みられてきた各国における理念や政策をめぐる議論 [ブシャール 2017;ブルーベイカー2016;石川ほか 2012] や、人の移動と人種や先住民との関係を考察したもの [エル・タイェブ 2007;ウィンチェスター2013] など、多岐にわたる研究がある。そのほかにも、多文化主義への批判を踏まえつつ、様々な視点から多文化社会における社会統合や共生についての議論が行われてきた [キムリッカ 2001;日本移民学会 2008;白川 2012;Modood2013;飯笹 2013]。これらは、移民を含む様々な立場のマイノリティを、多文化社会という場において捉えた研究といえよう。

また、トランスナショナリズム研究の文脈においても、場所への注目がみられる。広田 [2010] はトランスナショナリズムの展開について説明するなかで、「移動の結節点としての場所」に言及しているが、その場所がグローバル社会におけるネットワークの一地点として存在し、かつローカルな社会においても意味をもつ場所であると説明し、場所という視座を据える重要性を指摘している。しかしながら、上述のように、様々なモビリティがあるなかで、トランスナショナルな移動が移民にとって重要なものとして位置付けられ [ハージ 2007]、日々の生活におけるモビリティや社会的移動への注視はみられない。

1-3 多文化社会における移民のモビリティ

社会におけるモビリティへの着目は、人の移動を扱う移民研究においても今日的な傾向として現れているが、それを移民の生活する場や空間の再考に繋げる必要性が説かれている [伊豫谷 2013]。一方、移民が生活する社会という場を起点とした多文化共生や多文化社会に関する議論においては、モビリティについての言及はほとんどみられない。言及されている場合でも、取り上げられるほとんどがトランスナショナルな移動である。つまり、現代社会に

影響を与える様々なモビリティの複合 [アーリ 2015] と移民の関係についての考察は、トランスナショナルな移動に偏重してきた移民研究においては、これまで十分になされてこなかったと言えるのではないか。これを踏まえ本稿では、移民を成員とする多文化社会やその形成に、移民のモビリティがいかに関わっているのかを、カナダのトロント近郊にて実施したインドからのパンジャブ移民への調査より考察していく。また、パンジャブ移民は、インドのパンジャブからの移民とパキスタンのパンジャブからの移民に分けることができるが、以下、本稿記載のパンジャブおよびパンジャブ移民は、インドのパンジャブを指すこととする。

パンジャブは、インドのなかで多くの海外移民を輩出している地域であり、その主な移住先はイギリス、カナダ、アメリカ合衆国である。なかでも、近年著しい移住者数増加がみられるのがカナダである [Tatla2014]。イギリスでは 1950 年代および 1960 年代にパンジャブからの直接移民数がピークに達したのに対し [Chanda and Ghosh2013:5]、カナダとアメリカ合衆国への移民の波は、両国の移民政策によって、それぞれ 1960 年代半ば、1970 年代半ば以後となった。いずれの移住先においても、パンジャブ移民のなかでも割合の多いシク教徒が通う寺院が設立され、寺院にはインドから司祭をはじめ寺院運営に携わる人々が派遣されることが多い。その他、インドの家族への送金に加え、病院の設立や学校への寄付などを通じた、パンジャブと移住先との繋がりをみることができる [Walton-Roberts2003; Dusenbery and Tatla2009; Brar2015; Varghese and Thakur2015]。その一方、イギリスにおける東アフリカ旧英領諸国からの再移民、アメリカ合衆国における 2001 年 9・11 同時多発テロ以降 [Singh2014] など、地域ごとに異なる歩みがある。1985 年のエア・インディア機爆破事故の後、シク教徒によるパンジャブの自治および分離を掲げるシク教徒過激派の温床となってきたと言われているのが、カナダのシク・コミュニティである [Tatla2014:508]。

カナダのパンジャブ移民またはシク教徒移民についての先行研究では、カナダと他地域とを比較したもの [Model and Lin2002]、移民コミュニティの歴史を主に論じたもの [Singh2018] や出身地と移住先のトランスナショナルな関係 [Walton-Roberts2003] やジェンダーに関わる問題 [Mand2002; Mooney2006] を扱ったものがみられる。教育や医療分野 [Chiappe and Siegel1999; Howard et al.2007; Giampapa2010; Galdas et al.2012]、移民コミュニティと政治に関する研究 [Sing and Singh2008] もある。様々な視点からカナダにおけるパンジャブ移民またはシク教徒移民の研究がおこなわれているが、モビリティについて論じたものや、モビリティと多文化社会の関係に着目した研究は見当たらない。本稿では、カナダの多文化主義と移民受入政策を背景に、1960 年代から現在まで流入を続けるパンジャブ移民の事例から、移民とそのモビリティが多文化社会形成にいかに関わっているかを考察する。

2 トロント近郊における M 氏の活動

本研究はトロント近郊 A 郡の P 地区にて 2015 年 9 月から 2018 年 9 月にかけて断続的におこなわれた参与観察調査と聴き取り調査をもとにしている。具体的には、移住後から今日までの数十年間、カナダ社会にて活動を続けてきた M 氏に着目する。M 氏は調査地域において最も早い段階に移住したインド系移民の一人であり、スィク教寺院やパンジャーブ移民コミュニティ・グループ、インドからの新たな移住者や訪問者などから、ほぼ毎日さまざまな問い合わせや相談を受けている。そのため、カナダ社会におけるパンジャーブ移民の状況を把握しうる立場にあり、その状況を踏まえ、カナダにおける移民の社会参画を促すための活動をしている。後述する移民支援組織にて、筆者が調査目的を話した際に、まず紹介されたのが M 氏であった。本稿では、M 氏へのインタビュー、M 氏が関与するグループ活動での参与観察やインタビューをもとに、パンジャーブ移民を中心とする文化実践とそこにみられる紐帯、そしてモビリティの関係を考察し、多文化社会という文脈において捉える。人々のモビリティと文化実践が多文化社会形成にいかに関与しているのか提示したい。

2-1 調査地概要

本研究の調査地である P は、カナダ東部オンタリオ州の都市トロント近郊に位置する。カナダでは外国生まれの移住者人口数が増加し続けており、2016 年センサス (Statistics of Canada) によると、全人口の 21.9% を占めるに至っている。なかでもトロントは人口の 46.1% が新規移住者という高い割合となっている。調査地 P 地区を含むトロント近郊 A 郡は、トロントよりさらに多く、人口の半数以上を移住者が占めている。また、A におけるヴェジブル・マイノリティ¹の割合は 6 割以上にのぼり、そのうち約半数以上が南アジア系²とされている。この A 郡に位置するのが調査地 P 地区である。

2-2 M 氏の足跡

M 氏は 1937 年に現在のパキスタン東部パンジャーブ州の都市ラホールで生まれ、商人カーストの裕福なスィク教徒家庭で育った。1947 年にインドとパキスタンが分離独立をした際、M 氏とその家族は命からがらインド領側のパンジャーブ州へ渡った。M 氏の家はラホールでも有数の土地や資産を有し事業を手がけていたが、難民として逃げてきたことで、無一文からのスタートとなった。生活は一変したが、幸運にも学校へ行き進学し、修士号を取得する。そして、インド北西部に位置するパンジャーブ州及びハリヤナ州の州都チャンディイーガルのカレッジにて物理講師の職を得て、結婚し、子供も生まれた。

1962 年に、カナダのオンタリオ州トロント近郊 B 郡に移住する。妻の親族がアメリカ合衆国ハワイに住んでおり、その話を聞いていた妻が海外への移住を強く希望していた。その親族らが、M 氏一家の移住の可能性を探り、B 郡のカレッジでの職に応募することを提案し

¹先住民を除く非白人系の人々を意味する用語としてカナダで用いられている。

²カナダにおける南アジア系(South Asian)は、パキスタン、インド、ネパール、スリランカ、バングラデシュ出身者を指す。

た。M氏は応募書類を揃えて郵送し、インドと同様に物理講師として働くこととなった。M氏がカナダに渡った1962年は、人種や国籍による移民制限がカナダで初めて撤廃された年だったが、アジア系移民に対する偏見や差別は日常茶飯事であり、カレッジ内でも同様であった。学生からも「インド人教員など不要」とあからさまに嫌がられる日々が続いた。職場でもそれ以外でもアジア系移民に対する風当たりは強く、家に帰っても一人で寂しく、かつ身の回りのことを全て自分一人で行わなければならない、家族を呼び寄せるまでの5年間の一人暮らしはとても厳しかった。しかしながら、この間の経験は、社会において関係と信頼をどのように築いていくか、そしてその方法を学ぶ期間でもあった。そして、その経験をどのように移民コミュニティに還元できるのかについても、この間に学んだという。その後、職場では、教え方がうまいことが徐々に評判となり、人気者となった。そうすると今度は、同僚からの妬みによる嫌がらせが始まった。自分や家族のほかにも、差別や偏見に苦しむ南アジア系住民が多くいることから、問題を解決していくための組織として、B郡のSouth Asian Human Relations CommitteeやEast Indian Associationを立ち上げた。また、シク教寺院の設立と運営にも奔走した。シク教寺院があれば、シク教徒の生活に必要な儀礼を行うことができる。加えて、南アジア系移民の集まるコミュニティ・センターとしての機能や、必要な人に無料で食事を提供する社会福祉的機能もある。寺院が移民の生活にとって必要な場所だと考えた。また、当選には至らなかったが、各方面へのコネクションやネットワークを築くため、1970年台後半には地方選挙にも立候補した。

勤めているカレッジからは、アメリカ留学や香港への出向の機会を与えられ、また学会等により様々な場所へ赴く機会を得て、定年を迎えた。隣のA郡に移り、そこでもシク教寺院を設立し、現在も運営に携わる。設立計画や資金の工面、敷地購入や駐車場賃貸などはM氏が進め、実際の建設作業等は大工職人であるシク教徒らがボランティアで参加してくれた。寺院の他にも、南アジア系住民の参加を念頭にシニア・クラブを設立し、自身も参加している。

2-3 M氏の社会活動

M氏は、毎週3つの集まりに参加している。寺院の用務や各方面からの相談事のために都合がつかないことや、自身の体調不良のために参加しない日もあるが、集まりがある火曜日、水曜日、金曜日の午後の時間帯には予定を入れないようにしている。このうち、金曜日の集まりは、M氏自身が設立したシニア・クラブの集まりである。火曜日の集会は移民支援組織の援助によるもので、とくに組織を介していないのが水曜日の集まりである。ここでは、まず、M氏によるシニア・クラブの設立と、シニア・クラブによる金曜日の定期集会について説明する。そして、火曜日と水曜日の集まりについてもみていく。参加メンバーの一部は重なるが、運営形態や規模の異なる集まりをとりあげ、インドのパンジャブ出身者を中心とする移民による文化実践とそこにみられる特徴を探る。また、文化実践による紐帯とモビリティとの関係についても、後に考察する。

2-3-1 シニア・クラブ

2010年、家に閉じこもりがちな移民高齢者向けの催しや情報発信のためのNPOとして、M氏はシニア・クラブを設立するため、必要な手続きを進め、2011年に正式に発足した。M氏のようにカナダにて高齢を迎えた人もいれば、高齢者として移住してきた人もいるため、移住経緯や生活環境は様々ではあるが、外出する用事もなく、かといって家ですることもない、という高齢者共通の問題を認識した。そのような高齢者が社会とのつながりをもつ機会をつくる、というのが発足の目的である。催しの内容は、多くの参加者がパンジャービーであることから、パンジャーブ関連のものも目立つが、それに特化しているわけではなく、メンバーもパンジャービーに限定しているわけではない。発足時からのメンバーに加え、家族呼び寄せなどで新規に移住してきた高齢者が、クラブの存在を口コミで知り、新メンバーとしてクラブに参加するのである。年会費20カナダドルを払えば、誰でもメンバーとなることができる。

このクラブのメンバーは2017年末時点で241人である。うち約3割強が女性である³。メンバーの出身地についてクラブでは正確に把握はしていないが、M氏によれば、パンジャーブにルーツをもつ人が多いという。参加者に話を聞いてみると、パンジャービー語が母語であるが、実際の出身地はインド領パンジャーブに限らず、デリーやその近郊から来た人、東アフリカからイギリス経由で来た人などがいる。主な活動は毎週金曜日の定例集会のほか、年に数回催されるピクニックやバーベキュー、カナダの建国を祝うカナダ・デー、クリスマス、ローリーと呼ばれるパンジャーブ地方のお祭り⁴、インド共和国記念日、バレンタイン・デーなどにちなんだイベントが開催される。

次に、毎週金曜日の午後2時から開催される集会の内容をみていきたい。クラブの集会場であるSコミュニティ・センターの大部屋には長机と椅子が並べられ、80人程度は座れるようになっており、毎回70名ほどが参加する。席は自由であり、とくに決まっているわけではないが、会場前方に向かって右側に女性が、その反対側に男性が座っている。どちらか側に夫婦で隣同士座っている人たちもいるので、完全に男女分かれているわけではなく、たとえば男性が女性側の席に着いても、咎められることはない。女性が男性側の席についても同様である。しかしながら、隣に座らずそれぞれの側に分かれて着席する夫婦も多く、1人で訪れている場合には、迷うことなく同性側の席に着く人がほとんどである。

着席し一息つくと、お茶と甘い菓子やスナックを取りに部屋の後方に向かう。そこには長テーブルの上にミルクティーの入ったサーバー、紙コップ、紙ナプキン、砂糖、スプーン、甘い菓子やスナックなどの軽食が並べられていて、ブッフェのように各自が取りに行く。テーブルを挟んで、ミルクティーをカップに注ぎ手渡す人、紙ナプキンとスプーンを渡す人、菓子やスナックを1人分ずつ皿に盛り分ける人、その皿を手渡す人など5名ほどが立ち、役割をこなしている。ミルクティーと軽食を受け取ると、会場にいる顔見知りのところを周り、各所で挨拶や雑談を終えてから席に戻る。

³2017年会員名簿による。

⁴冬至とその時期の農作物の収穫を祝う祭り。太陽暦の1月13日に毎年祝われる。

30分ほどの雑談の時間を経て、着席を促すアナウンスが流れると、次のプログラムが始まる。集会では毎回10人ほどが順番に会場の最前方でマイクを持って立ち、自作の詩を読んだり、歌を歌ったり、近況や共有したい事柄についてアナウンスしたりする。毎回異なる人が何かを準備して披露することになっている。その後、座ったままでもできるヨガ体操、P地区周辺でのイベント等告知があり、合計1時間半ほどで集会が終了する。途中の入退室は自由であり、途中から参加する人や終了前に帰る人も少なくない。また、すべてのやり取りは基本的にパンジャブ地方で話されているパンジャービー語もしくはインド北部を中心に話されているヒンディー語でおこなわれており、英語はたまに挟まれる程度である。高齢者移民の中には、英語でのコミュニケーションを苦手とする人も少なくないためである。

2-3-2 その他の集り

上述したシニア・クラブのほかにも、火曜日と水曜日にM氏が毎週参加する集会がある。M氏はそれらの活動にも積極的に関与し、参加者の送迎や軽食手配の補助、参加者の意見を聞き問題等があれば調整するなどしている。

火曜日の集り

毎週火曜日の午後2時にはRモールにあるコミュニティ・ルームで実施される集まりがあり、毎回15人ほどが集まる。参加者はM氏のほかシニア・クラブにも参加している人が数人、その他パキスタンやアフガニスタン出身者が参加している。M氏のようにほとんど毎回顔を出す人もいるが、時々参加するという人も多い。集まる人々は、30歳代から80歳代まで異なる世代からなる。Rモール内に事務所がある政府系の移民支援組織が支援している。この組織は、トロントとその近郊に事務所があり、各事務所にて英語教室、コンピューター教室、高齢者向けのイベント、子どもサマーキャンプなどのほか、定住支援や就職支援のためのカウンセリングも行っている。この火曜日の集まりは、移民の社会参画やネットワーキングを支援するための活動として、組織から運営費が出されている。Rモール内事務所のコーディネーターであるパキスタン人女性のN氏が、会場の予約や提供される飲み物や軽食の用意をする。

コミュニティ・ルームのほぼ中心に設置されたテーブルを囲んで座る。座席は決まっておらず自由だが、女性同士、男性同士がまとまって座る。男女比は毎回変わってくるが、均衡しているかやや女性が多い。部屋の端にあるテーブルには、電気ポット、ティーバッグ、クリーム、ビスケットや果物などの軽食が置かれ、N氏と参加者の数名が人数分の紙コップにミルクティーを作る。軽食も人数分の皿に盛られ、N氏と他の数名によってミルクティーと軽食が参加者それぞれの席に運ばれる。まずN氏が移民支援組織による催しや、次回以降の集会開催予定日についての案内をアナウンスする。その後、シニア・クラブと同様に、詩や歌、冗談や感動話などが誰からともなく披露され始める。5人程度が披露するが、その合間には、感想やそこから派生した内容に関する話題で盛り上がる。話題提供等が少ない時には、簡単なヨガ・エクササイズをやることもある。午後3時半ごろまでこのように過ごして終了する。遅れてきたり、先に帰ったりする人も少なくない。ここでは主にヒンディー語とパキスタンの公用語であるウルドゥー語が使われているが、N氏が休暇で不在時などは、南アジア

ア出身ではない他のスタッフがやって来て英語で各種案内がなされる。別日にこの移民支援組織によって実施されるピクニック、健康診断など医療支援、英語やコンピューター教室などの案内が頻繁におこなわれていることから、この組織からの援助が、カナダ主流社会に移民を統合することに焦点を当てる現在のカナダの政策 [ノールズ 2014;Government of Canada2018] に基づくものと考えることができる。

水曜日の集り

毎週水曜日の午後 2 時から、S コミュニティ・センターにて集会がある。この集まりは、参加者本人による毎月の 2 カナダドルの参加費によって運営されている。活動団体としての登録はしていない。名簿などもなく、移民支援組織等による補助も受けてない。参加人数は 15 人程度であり、同センターの中部屋を会場としている。部屋の中央には縦長にテーブルが並べられている。席は決まっておらず自由だが、片側に男性、その反対側に女性が並んで座る。参加者は女性が 6 割から 7 割ほどである。M 氏のほか数名は毎回参加するが、時々参加する人や年に数回だけ参加する人など、様々である。集るのはほとんどが 60 歳以上の世代である。北インド出身者が多いが、パキスタン出身者もいる。

参加費はミルクティーや軽食の費用に充てられるが、個人によるスナックや菓子などの差し入れが多い。部屋の端にあるテーブルには、火曜と同様に電気ポットとティーバッグ、砂糖、クリームが用意され、女性数名が人数分のミルクティーを作り、用意された甘い菓子やスナックのほか差し入れを人数分の皿に分けて、テーブルに運ぶ。お茶と軽食をいただきながら、近況を報告しあう。各自の体調や持病、一時帰国の予定、親族や友人の訪問、休日や週末の外出などがその内容である。お茶と軽食が済むと、冗談や感動話の披露があったり、ピクニックの提案があったり、すでに決まっているピクニックや小旅行についての相談をしたり、様々な話題について話し合う。加えて、座ったままでできるエクササイズをすることもある。午後 3 時過ぎになると席を立つ人が出始め、午後 3 時半にはお開きとなる。ここで使われている主な言語はヒンディー語およびウルドゥー語である。

上記の 3 つの集まりは、それぞれ運営形態が異なる。シニア・クラブは、年会費を支払っている会員を擁する NPO であり、そのクラブが金曜の集会を運営している。火曜日の集まりは、参加者および会員の名簿などはなく、支援組織に紹介されて参加する移住間もない移民も少なくない。A 郡の移民に占める南アジア出身者の多さから、支援組織を訪れる移民も南アジア出身者が多いが、それ以外の出身者が組織を介して火曜日の集会を知り、参加することもある。参加者の 3 分の 1 ほどはほぼ毎回参加するメンバーであるが、それ以外は月に 1、2 回程度の参加者や新規の参加者である。水曜日の集まりも参加者や会員が決まっている訳ではないが、火曜日の集会に比べると、参加メンバーの変化は少ないと言える。各人の予定や体調により毎回の参加が叶わないということもあるが、それでもほとんどが月 2、3 回は参加し、時に友人や知人を連れてくる。その友人や知人がその後定期的に参加するようになることもある。また、その週の都合に合わせ、火曜日か水曜日のどちらかに参加するという人もいる。火曜日と水曜日の両方に毎回参加する人が M 氏のほか 4 名ほどいる。火曜日の会場である R モールと水曜日の会場 S コミュニティ・センターは車で 10 分ほどの距離である。

南アジア系移民の中でも、とくにパンジャブ移民にとって、これら3つの集まりは、慣れ親しんだ言語や食事を仲間と共有する場となる。さらに、共通の文化的背景からくる移住先での問題やその対応について共有できる機会であり、家庭外においても移民が文化的慣習を維持する場でもある。これは、一見、閉鎖的な移民の文化実践によるゲッター化の例のようにもみえる。しかしながら、以下で述べるように、これらの集会におけるいくつかの文化実践のあり方には、むしろ閉鎖的にならないような配慮がなされている。

3 紐帯をつくる文化実践

ここでは、上述の集会でみられる文化実践と、その場が閉鎖的にならないための配慮について考えてみたい。

3-1 ジェンダーによる空間分別

シニア・クラブで共有されているジェンダーによる空間の分離は、集まる人々にとっては慣れ親しんだものである。これは、おもに公共の場において性別に基づき場所を分けるといふ、かれらの出身地でみられる慣習によるものだ。M氏は説明する。

男女分かれてでないと、不快で気分が悪いと感じる人がいる。クラブの集まりでは、誰かが嫌な思いをするようなことは避けるべき。他の集まりでも、私たちは大体こうやって分かれて座る。私たちにとってはこれが普通だから、気分的にも来やすいと思う。

(2017年8月10日 A郡Rモール)

また、ここでみられるジェンダーによる空間分別は、シニア・クラブのみで共有されているわけではない。パキスタン出身者やアフガニスタン出身者が参加する火曜日と水曜日の集まりにおいても同様の実践が確認できる。さらにイスラーム寺院やシク教寺院においても同様の空間分別がみられる。この実践について参加者は以下のように語る。

私たちは、この方が快適。女性は女性同士で隣に座った方が安心するし、知らない男性が隣に来たら不安で落ち着かない。そうすると男性も女性もお互いに気分が悪い。私たちが集まる場所では、これが自然なやり方。若い子たちはまた違うと思うけど。(2015年9月10日 A郡Rモール)

この実践は、世代やこれまでの生活環境による差異はありつつも、身体化された感覚とともに参加者に広く共有されている。集まりにおいてこのような空間をつくり、保つことが、「参加しやすさ」にもつながるとM氏は考えている。

3-2 食事に関する実践

続いて、シニア・クラブほかその他の集りにおいて供される食事に関する実践を見ていく。シニア・クラブの集会で振舞われるのは、インド亜大陸北部でよく飲まれているチャイとよばれる甘いミルクティーである。糖尿病などのため健康に配慮する人も多く、砂糖は別に添えられる。チャイのほか、甘いお菓子やスナックも用意される。これらは、北インドやパキスタンなどインド亜大陸北部出身者がよく訪れる食料雑貨店やレストランで売られているもので、クラブジャンムー、ジャレービー、バルフィーなどの北インドでは定番の甘い菓子のほか、サモサとよばれるスナックもよく並ぶ。毎月最終金曜日には、いつものチャイと菓子のほか、ピザが提供されるため、ランチをかねた集まりとなる。クラブで振舞われるのは、すべてベジタリアン対応のものである。

クラブメンバーにはベジタリアンではない人の方が多いと考えられるが、ベジタリアンもいる。シニア・クラブの大半のメンバーの出身国であるインドに比べると、ベジタリアンへの対応が圧倒的に少ないカナダでは、ベジタリアンの人にとって外での食事に不安がつきまとう⁵ということはよく認識されている。そのため、クラブでの食事は参加者だれもが安心して楽しく食べられるように、ベジタリアン食に限られる。

この食事に関する「ルール」は、火曜日や水曜日の集会においても共有されており、その理由について M 氏はこう説明する。

来る人の多くはベジタリアンではないから、全てがベジタリアン用でなかったとしても、実際はそんなに大した問題にならないだろう。でも、ベジタリアンの人は自分が食べることができないものが出されていて、来にくく感じてしまうかもしれない。ベジタリアンじゃなくても、ベジタリアン食は問題なく食べられる。逆にベジタリアンは非ベジタリアン食を食べることはできない。ベジタリアン食であれば、誰もが何も気にせず食べることができるし、そのことで来にくく感じたりする人もいない。ここに誰もが気兼ねなく来れることが大事。(2018年2月23日 A 郡中部ショッピングモール)

このように、参加者がベジタリアンという食事規範を実践できることに加え、食事規範をもつ人が安心して参加できる点を重視していることが分かる。

3-3 集りにおけるコミュニケーションと言語

次に、集会でのレクリエーションの内容や用いられる言語について考察したい。チャイを飲みながら自由に挨拶を交わし雑談する時間が終わると、その日に予定されている人が、パフォーマンスを披露する。韻を踏んだ詩、面白い冗談話、感動する話など、自分で創作したものもあれば、誰かから伝え聞いたもの、SNS を通じて知ったものなどさまざまである。そのほか、同世代のメンバーみなが知っている歌を歌ったりもする。観客となっている人たちは、拍手や手拍子、かけ声などで盛り上げ、歌の場合は一緒に歌う。詩や話、歌の内容は、

⁵インドでは、ほとんどの食料品にベジタリアン用かノンベジタリアン用かのマークが記載されている。レストランのメニューにも明示されている。

パンジャブを舞台にしたもの、自身のシニア世代と子どもや孫の世代との齟齬を描写したもの、老いや孤独を憂うもの、移民の苦労や寂しさを語るもの、パンジャブの昔話を題材にしたもの、若いころに流行った映画の音楽など、さまざまである。発信者は、自身の心に響いたものをメンバーに紹介し共有したい、というのがそれぞれのパフォーマンスの基底にあり、聴衆となる側もそれを十分に理解し、楽しんでいる様子が見てとれる。それぞれが準備したものを披露する頻度は、人によって異なるし、前に出るのを好まない人もいるが、誰もが何かを発信でき、その発信が歓迎され好意的に受け入れられる機会となっている。引用する話の元が英語やヒンディー語であることも多く、その場合はパンジャービー語にヒンディー語、英語が混ざる。元の話がパンジャービー語のものであっても、話の内容はパンジャブ出身者以外も共感できるような題材が選ばれている。

火曜日と水曜日の集会でも、詩、冗談話、感動話などが共有されている。火曜日と水曜日の場合では、参加者には、シニア・クラブより多様な背景がみられ、パンジャービー語よりもヒンディー語やウルドゥー語が主に用いられる。参加者の多くを占める南アジア出身者に広く知られているボリウッドと呼ばれるヒンディー語映画やその俳優を題材にしたものなどが選ばれる。

パキスタンでもボリウッド映画はよく見るし、皆が知っていて有名な歌はボリウッドの曲だし、インドもパキスタンもあまり変わらない。私たちは違うところから来ているけど、言葉も文化も同じだから、映画もドラマも共感するものが多い。(2017年8月9日 A郡Sコミュニティ・センター)

これらの毎週火曜日、水曜日、金曜日に催されている集会に参加している人々が、日常的に利用している言語は、パンジャービー語、ヒンディー語、ウルドゥー語である。これらの言語を母語とするシニア世代間では、それぞれが異なる言語を話していても相互に理解可能であり、コミュニケーションが成立する。また、アフガニスタンやスリランカなど、ボリウッド映画がよく見られている地域出身者には、ヒンディー語を解する人々も少なくない。異なる言語を母語とし、出身国も異なるが、ヒンディー語やウルドゥー語など、相互に理解可能な言語を介したコミュニケーションがみられる。

4 モビリティと移民の文化実践

これまで、M氏が関わり参加する集会とその内容をみてきた。これらにおいて、どのようなモビリティとの関係が見出せるのかを考察するために、本節ではまずモビリティについての議論をみていきたい。それから、M氏のモビリティ経験と集会における文化実践の関連について詳しく述べる。

4-1 モビリティと移民

本稿におけるモビリティは、ジョン・アーリの議論を土台とする。アーリ [2015:18-19] はモビリティという語の意味を、1) 移動しているか、移動可能なもの、2) 暴徒や野次馬といった野放図な群衆、3) 上方ないし下方への社会的移動、4) 移民や半永久的な地理的移動、という4つに大別しているが、本稿ではおもに1)、3)、4) に着目しながら移動性(モビリティ)を考えたい。3)の「上方ないし下方への社会移動」とは、ある程度明確に区切られた垂直的な地位のヒエラルキーにおける移動を意味し [アーリ 2015:18]、ここでは「垂直的な社会移動」と呼ぶことにする。4)の「移民や半永久的な地理的移動」とは、干ばつ、迫害、戦争、飢餓などから逃れたりするケースなど、「よりよい生活」を求めての地理的な移動であり、長期的および水平的な意味で「移動中」を意味し [アーリ 2015:19]、ここでは「水平的な地理的移動」と記す。この「水平的な地理的移動」を含めた物理的な移動と「垂直的な社会的移動」の間には複雑な関係がみられること [アーリ 2015] や、両者の関係を捉える重要性 [ハージ 2007] が論じられている。

またエリオットとアーリ [2010] は、生活の様々な次元で場所に捉われないモバイルな生活がみられる一方で、対面式の集り (meeting) とそれによる共在 (co-presence) こそが、人間同士の紐帯を維持し広げる鍵となっており、その紐帯が人々のモビリティを担保するネットワーク資本を支えていると述べている。つまり、集りとそこにみられる共在という実践が、モビリティのあり方に関与しているという。ここでのモビリティは上記の水平的な地理的移動と垂直的な社会的移動に加え、日常生活における移動や移動可能性が含まれる。

これらの議論を踏まえ、上述したM氏のモビリティ経験から「垂直的な社会移動」と「水平的な地理的移動」の関係を考察する。そして、M氏が参加する週3日の集まりとそこでの文化実践における「対面式の集り」および「共在」の意味について、また、それらを介したネットワークについて考察したい。

4-2 M氏にみる水平的かつ垂直的なモビリティ経験とその影響

M氏のモビリティ経験について考えてみると、これまで幾度もモビリティ経験を重ねていることが分かる。水平的なモビリティについて見てみると、M氏は生まれ育った現パキスタン領の都市ラホールから、インド・パキスタン分離独立によって策定された国境の反対側へ、つまりインド側へ移住しなければならなかった。さらに、進学のために学校のある場所に移住し、就職先のある場所へ落ち着くも、程なくカナダへ移住することになった。これらの水平的で地理的な移動は、垂直的な社会移動を伴うものでもあった。裕福な資産家の息子だったが、難民となり、苦学生からカレッジの講師となり、社会的名声を得る職に就くことができた。しかしながら、カナダに渡ると、差別と偏見に見舞われ、また、しばらくは家族と離れた一人の生活を送らざるを得ない厳しい状況となった。

その後、長く続くカナダ居住期間においては、垂直的な社会移動は安定的に上昇してきたと言える。M氏は、差別や偏見による人権侵害の解消を目指す組織を立ち上げ、南アジア系移民のリーダー的存在となった。自分以外はほとんどいなかったインド人移民が徐々に増え、助けを求められる立場となり、それに応えてきた。政治政党との繋がりや各方面とのネット

ワークを築くため、選挙へも立候補した。現在も精力的にコミュニティのため、そして社会のための活動に従事する。

これらの水平的かつ垂直的なモビリティ経験において、M氏は「インド人」から「インド人移民」、そして「カナダ社会の一員」へという自身の立場の変遷を経験している。M氏はカナダ移住直後の5年間で学んだこととして、次のように話す。

インド人は移住後も移住前と変わらない行動を取る。それに対し何の疑問も抱かない。自分の周囲のインド人との関係しか目に入らないことも多い。自分たちがカナダにいて、カナダ社会の一員なんだという自覚がほぼゼロ。インド人もカナダ社会の構成員であるということコミュニティが共有していかないといけないと認識した。(2018年9月11日 A郡Sコミュニティ・センター横ショッピングモール)

「カナダ社会の一員」という意識が、M氏の携わってきた社会活動に与える影響は大きい。M氏は、シニア・クラブを創設した理由を次のように説明した。

仕事を退職して、子どもも独立して、そうしたら何もやることがない。出かける場所もない。何もせずに家にいるだけ。多くの人がそうやって過ごしてるけど、それは不健康なこと、いいことではないと思った。クラブのメンバーだけでなく、外に出て近所の人に会えば挨拶するし、バスにも乗るし、センターにはたくさんの方が来てる。外に出ることで、自分がその社会の中にいることを認識する。それから、周りの人は、こういう人が社会にいるんだ、と目にするようになる。これは本人たちにとっても、社会にとってもいいこと。コミュニティのためでもあるし、カナダ社会のためにもなる。こういう役に立つことを自分がお膳立てできるのなら、喜んでやる。(2018年2月23日 A郡中部ショッピングモール)

M氏の説明からは、移民コミュニティだけではなく、コミュニティを含むカナダ社会への視座を見いだすことができる。また、人々が集りに参加することの意味や重要性について以下のように話す。

集りに来たら、それぞれ役割のようなものがある。軽食を準備したり、お茶を準備したりするのもそう。そのやり方、振る舞い方が悪くて不平が出ることもあるけれど、だからといって役割を奪ってはいけない。参加やそこの役割を通して、社会の一員としての自分を確認する。社会のなかで尊重された存在だと示し、そのように自分で思ってもらうために、役割を続けてもらうのが大事。(2018年2月23日 A郡中部ショッピングモール)

ここからは、M氏が移民を社会の成員として俯瞰的に眼差している様子が伺える。それは、移民の代弁者としてだけではなく、水平的かつ垂直的モビリティを経て到った「カナダ社会の一員」としてのM氏の経験によるものと考えられる。

4-3 共在、ネットワーク、モビリティ

M氏が関わる集会における文化実践において、共在やネットワークはどのような意味をもつのだろうか。またそれは、モビリティとどのような関係にあるのだろうか。

4-3-1 共在によるネットワークとモビリティ

M氏が創設したシニア・クラブのほか、比較的小規模な火曜日や水曜日の集会において、ジェンダー、食事、コミュニケーションに関する共通の文化実践を取り上げた。ネットワークの視点から捉えると、それらの集会に集まる人々は、文化実践を介した共在により維持されるネットワークで繋がっている存在であると言える。では、人々を繋げるネットワークは、どのようにモビリティと関わっているのだろうか。アーリ [2015] は、共在を可能にするのはモビリティであると論じているが、本稿の事例においても同様のことが言える。ここでは、モビリティのなかでも日常生活における移動および移動可能性に着目しながら説明したい。

集りに参加するには、自宅からその会場に移動する必要がある、この移動手段の手配は人それぞれである。シニア世代や移住して間もない女性には自動車運転免許を保持しない人も多い。タクシーは運賃が高いためバスを利用する。バスを乗り継ぐとほとんどの目的地にたどり着けるほどバスの路線は広く展開しているが、運行本数や乗り継ぎの関係で、乗車時間と同様もしくはそれ以上の待ち時間を要することもある。そのため、子どもに車での送迎を頼むか、同方面に住んでいて自分の車を運転してくる人に乗せてもらう、もしくは都合のいい場所から乗せてもらい、帰りは降ろしてもらう、というような場合が少なくない。このようなモビリティの確保を支えているのが、かれらのネットワークである。

モビリティ環境は車の所有有無により左右されている。車を所有し、自ら運転する参加者の多くは、M氏をはじめ大学を卒業し、専門職やホワイト・カラーの職業、自営業などの職歴をもつ。一方、自分で運転する車を所有しない参加者には、義務教育期間後は農業、海外での出稼ぎ労働、女性の場合は専業主婦業に従事してきた人が多い。このように、社会階層差がモビリティ環境の差としても現れているが、集会参加のためのモビリティに関しては、かれらのネットワークによってその環境改善が試みられていると言える。

シニア・クラブと水曜日の集会で使われているCコミュニティ・センター（以下Cセンター）には、P地区内を走る路線バスのターミナルが併設されており、ここを発着するバスの本数は比較的多い。一方、火曜日の集会が行われるのはRモール内のコミュニティ・ルームである。Rモールには大型スーパーを含む商業施設が揃い、P地区の行政手続きを行うサテライトの役所、銀行や電話通信会社も入っているが、Rモール発着のバスは少ない。そのため、火曜日の集会参加者にはRモール裏手にある集合アパートに暮らす人が多い。この集合アパートからRモールまでは一番遠い棟でも徒歩10分から15分程度である。この集会への参加者のおよそ半数はアパートの住民であり、あとは数人が運転する車に便乗してやってくる。

このようにモビリティの確保によって、集りへの参加、つまり共在の場にいることが可能となる。一方、エリオットとアーリ [2010] は、対面式の集りによる紐帯、つまり共在がモビリティを支えていると述べる。これらを踏まえると、モビリティによって共在が可能とな

る傍、共在を介したネットワークがモビリティを保持させていることになる。つまり、モビリティと共在のネットワークは、相互に支え合う関係にあるということであるが、これも本稿の事例に見出すことができる。

C センターや R モールへのモビリティの確保によって、集会における文化実践という共在の場が成立し、その共在を介したネットワークが形成されるのは前述のとおりであるが、このモビリティの確保には、共在経験によるネットワークの関与が前提ともなっている。同方面の人の車に乗せてもらうことや、誰かに都合のいい場所にてピックアップしてもらうことは、当人同士が既知の間柄でないと難しい。つまり、モビリティを確保する以前に、共在によるネットワークが存在している必要がある。このことから、共在とモビリティが相互を必要とする関係性であることが理解できる。

以上のことから、文化実践という共在の場に集う人々のネットワークとモビリティが相互に影響し支え合うかたちとなっていることを示した。それでは、この共在をもたらず文化実践と、これまでみてきた異なる次元のモビリティは、移民の生きる社会においてどのような意味をもつのだろうか。以下では共在の場である集会での文化実践のあり方から、その意味や社会との関係についてみていく。

4-3-2 越境的で開かれた文化実践とモビリティ

これまでみてきた文化実践を振り返りながら、移民の文化実践という共在の場とそこに集る人々が、越境的で社会に開かれた存在であることを以下で説明したい。

ジェンダーによる空間分別については、「ここでは、男女別々に座った方が、みんな落ち着ける」という共通の考えがあるが、絶対的に守らなければならないルールではない。夫婦で隣に座ることや、気心の知れた数人が男女入り混じって一緒に座ることもある。それは誰かに不快な思いをさせない限りは問題とならない。ここでみた空間分別は、集まる人々にとって慣れ親しんだ文化実践として維持されているが、厳格に運用されているわけではない。この空間分別に親しんでいる人には「参加しやすさ」を、そうでない人には空間分別に固執する必要のない「参加しやすさ」を感じさせるという包摂性を見出すことが出来る。

集まりで提供されるお茶や軽食についても同様である。ベジタリアン用の食事が用意されるのは、集まる人々がベジタリアンだからという理由からではない。ベジタリアン食にすることによって、参加者全員が提供されたものを心配なく口にすることができるからである。また、提供される飲み物は、砂糖別添えのチャーイであり、軽食が用意される際には、作りたてで新鮮なもの、かつ辛味のスパイスと油分は少なめであることが求められる。これらは、より多くの人が食事を楽しむための配慮であり、菜食主義者のための実践というより、参加者を限定しないための実践と捉えることができよう。

集会参加者それぞれの母語はパンジャービー語、ウルドゥー語、ベンガーリー語、ヒンディー語、パシュトゥーン語であるが、おもにヒンディー語もしくはウルドゥー語を介したコミュニケーションを行なっている。南アジアを中心とした広域に渡るボリウッド映画の影響等により、インド亜大陸北部出身者以外でもヒンディー語やウルドゥー語を理解する人は一定数おり、それらの人々が集まりに参加する姿も見られる。英語を日常言語とする人が参加する際には、英語での会話の割合が多くなる。なかには英語を苦手とする人もいるが、誰か

が横で適宜通訳をしている。また、参加者には、シイク、ムスリム、ヒンドゥー、クリスチャンがいる。このことから、出身国や宗教、民族的出自を限定することのない越境的な紐帯が、集会において創出されていることが確認出来る。また、英語を公用語とするカナダ社会を尊重するような姿勢もみえる。

このように、本稿でみてきた集りにおける共在は、移民コミュニティによる独自の文化実践の場でありつつも、その独自性は排他的ではなく包摂的な方向へと向けられている。この開かれた姿勢は、中心的な存在でもある M 氏の水平的かつ垂直的のモビリティを経て到った「カナダ社会の一員」という立場からの視点が影響していると考えられる。そして、これらの共在に参加する人々は、厳格に特定のアイデンティティにつなぎとめられた関係ではなく、越境的な紐帯により繋がっていると考えることができる。そのネットワークが、日常的な移動や移動可能性というモビリティにも関与し、人々に共在の場を提供していることは前述のとおりである。

4-3-3 多文化社会における移民の文化実践

上述したパンジャブ移民を中心とした越境的な紐帯や開かれた文化実践を、多文化社会という文脈においてどのように考えることができるだろうか。移民と社会に関する議論においては、多文化社会を構成するエスニック集団内の多様性を考慮せず、その集団の文化を一枚岩的に捉える本質主義的な文化解釈についての問題が指摘され、そのような文化解釈がエスニック集団の孤立化と社会的分断を結果的に引き起こすと考えられてきた [ノールズ 2014; 竹沢 2011; 飯笹 2013]。しかしながら、これまでみてきた事例からは、ある特定のエスニック集団による文化実践という枠では説明しきれないことがわかる。これは、エスニック集団の自明性に疑問を呈するブルーベーカー [2016] やモドワード [2013] の視点と重なる。さらに、エスニック集団としては捉えきれない人々の紐帯と、かれらによる文化実践の場は、外部に開かれたものであり、また、開かれたものであろうとする試みがあった。本稿の事例には、多文化社会における統合や多文化主義の失敗として語られる移民コミュニティのゲットー化やアパルトヘイト化の問題はあてはまらない。本稿でみてきた移民の文化実践は、独自の要素を持ちつつも、排他的なものではなく、外に開かれた空間であらうとする試みがみられる。つまり、ホスト社会との接点を見出そうとしていることがうかがえる。

5 まとめ

本稿ではトロント近郊 P 地区における M 氏の活動とその内容をとりあげ、移民の文化実践とモビリティの関係を考察し、それを多文化社会という文脈において捉えることを試みた。パンジャブ移民を中心とした集りにおいて、ジェンダーや食事、言語といった文化的独自性は、特定のコミュニティに閉ざされたものとしてではなく、より多くの人の参加を促すため実践であり、社会に開かれたものであろうとする姿勢がみられた。また、参加者自身が社会の成員であることを意識させるために、役割を尊重するなど、参加者と社会の接続が意識されていた。そして、このような特徴は、M 氏のモビリティ経験と関係があることをみた。

つまり、M氏が自身の水平的な地理的移動と垂直的な社会的移動を経て、またこれまでのカナダでの活動をとおして、「カナダ社会の一員」としての立場から現在の活動をおこなっており、それがパンジャブ移民を中心とした文化実践でありながらも、排他的でなく社会に開かれたものであろうとする集りの方向性に現れているといえる。

さらに、モビリティのなかでも移民の日常生活における移動や移動可能性という点に着目すると、文化実践を介した共在によるネットワークとモビリティが、相互に必要な不可欠なものとして関連していることを示した。そして、この移民の紐帯は、パンジャブ出身者を中心とする南アジア系移民の「集団」を創出させているが、この集団の文化的特徴は、通常エスニック集団を分類するのに用いられる宗教や言語、出身国などの枠に当てはめることができず、越境的なものであった。さらには共有している文化的特徴に対する固執や厳格さはみられず、ゆるやかな紐帯でもあった。

このように、本稿では、異なる次元のモビリティが、移民の生活や活動に影響を与えることを提示した。その影響は、越境的な紐帯をもつ人々による文化実践へと結びついている。モビリティとの関わりからみえてきた本稿における移民の文化実践やネットワークの事例からは、多文化社会において分断し孤立した移民ではなく、ホスト社会との繋がりを試みる移民の姿を確認することができた。越境的な紐帯とそこでの文化実践をみることによって、エスニック集団という分類単位を基本とする思考と、それによる均質的かつ本質的な文化表象が再生産されている状況に疑問を呈することができよう。もちろん、エスニック集団に限らず、ある集団が多文化社会において継続的に被ってきた歴史的な不平等を無視することは出来ず、その際にアイデンティティ・ポリティクスが重要となることは否めない⁶。しかしながら、本稿で論じた移民の越境的な紐帯や、社会において包摂的で開放的であろうとする姿勢は、これまでの研究では見えてこなかった多文化社会における移民の姿を示唆するものといえよう。

謝辞

本稿の内容は、2018年度第一回 FINDAS 若手研究セミナーでの発表がもととなっています。セミナーでの発表機会を与えてくださった方々、セミナーにご参加・ご意見くださった方々に御礼申し上げます。大変貴重な助言をいただきました査読者にも謝意を表します。本研究は JSPS 科研費 JP17K13591 の助成を受けたものです。

⁶マイノリティの不平等性やアイデンティティ・ポリティクスの問題に関しては太田[2012]を参照。

参考文献

【英語】

- Appadurai, Arjun, 1996, *Modernity at Large-Cultural Dimensions of Globalization*, University of Minnesota Press, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Brar, Jaswinder Singh, 2015, “Punjabi immigrants and rural development in the Doaba region of Indian Punjab”, Rahman, Md Mizanur and Tan Tai Yong (eds.) *International Migration and Development in South Asia*, Oxon: Routledge, pp. 169-183.
- Chanda, Rupa and Ghosh Sriparna, 2013, “The Punjabi Diaspora in the UK: An Overview of Characteristics and Contributions to India”, *CARIM-India Research Report*, 2013/8
- Chiappe, Penny and Linda S. Siegel, 1999, “Phonological Awareness and Reading Acquisition in English- and Punjabi-Speaking Canadian Children”, *Journal of Educational Psychology* 91-1, pp.20-28.
- Dusenbery, Verne A. and Darshan S. Tatla (eds.) 2009, *Sikh Diaspora Philanthropy in Punjab: Global Giving For Local Good*, New Delhi: Oxford University Press.
- Elliott, Anthony and John Urry, 2010. *Mobile Lives*, New York: Routledge.
- Galdas, Paul M., John L. Oliffe, H. Bindy K. Kang, and Mary T. Kelly, 2012, “Punjabi Sikh Patients’ Perceived Barriers to Engaging in Physical Exercise Following Myocardial Infarction”, *Public Health Nursing* 29-6, pp.534-541.
- Government of Canada, 2019 年 2 月 10 日アクセス, *2018 Annual Report to Parliament on Immigration*,
(<https://www.canada.ca/content/dam/ircc/migration/ircc/english/pdf/pub/annual-report-2018.pdf>)
- Howard, A. Fuchsia, Joan L. Bottorff, Lynda G. Balneaves, and Sukhdev K. Grewal, 2007, “Punjabi Immigrant Women’s Breast Cancer Stories”, *Immigrant Minority Health* 9, pp.269-279.
- Mand, Kanwal, 2002, “Place, gender and power in transnational Sikh marriages”, *Global Networks* 2-3, pp.233-248.
- Model, Suzanne and Lang Liu, 2002, “The Cost of Not Being Christian: Hindus, Sikhs and Muslims in Britain and Canada”, *International Migration Review*, 36-4, pp.1061-1092.
- Modood, Tariq. 2013. *Multiculturalism*. Cambridge: Polity Press.
- Mooney, Nicola, 2006, “Aspiration, reunification and gender transformation in Jat Sikh marriages from India to Canada”, *Global Networks* 6-4, pp.389-403.
- Singh, Gurcharan, 2018, *Condition of the Sikhs in Canada: 1901-2001*, Amritsar: Singh Brothers.

- Singh, Jaideep, 2014, "Sikhs as a Racial and Religious Minority in the US", Singh, Pashaura and Louis E. Fenech (eds.) *The Oxford Handbook of Sikh Studies*, Oxford: Oxford University Press, pp.524-533.
- Singh, Milan and Anita Singh, 2008, "Diaspora, Political Action, and Identity: A Case Study of Canada's Indian Diaspora", *Diaspora: A Journal of Transnational Studies* 17-2, pp.149-171.
- Statistics Canada. 2018 年 9 月 20 日アクセス 〈<https://www150.statcan.gc.ca/n1/daily-quotidien/171025/dq171025b-eng.htm>〉 .
- Tatla, Darshan Singh, 2014, "The Sikh Diaspora", Singh, Pashaura and Louis E. Fenech (eds.) *The Oxford Handbook of Sikh Studies*, Oxford: Oxford University Press, pp. 495-512.
- Varghese, V. J. and Vivek Thakur, 2015, "A Troublesome home? Transnational properties and its discontents in Indian Punjab", Rahman, Md Mizanur and Tan Tai Yong (eds.) *International Migration and Development in South Asia*, Oxon: Routledge, pp. 101-117.
- Walton-Roberts, Margaret, 2003, "Transnational geographies: Indian immigration to Canada", *The Canadian Geographer*; 47-3, pp.235-250.

【日本語】

- ブシャーレ ジェラルド、2017、『間文化主義-インターカルチュラリズム-多文化共生の新しい可能性-』、丹羽卓監訳、彩流社。
- ブルーベーカー ロジャース、2016、『グローバル化する世界と「帰属の政治」-移民・シティズンシップ・国民国家-』、佐藤成基・高橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳、明石書店。
- エル・タイェブ ファティマ、2007、「アーバン・ディアスポラ-ポスト-エスニック・ヨーロッパにおける人種、アイデンティティ、ポピュラー・カルチャー」、伊豫谷登士翁編、『移動から場所を問う-現代移民研究の課題』、有信堂、201-233。
- ハージ ガッサン、2007、「存在論的移動のエスノグラフィ-想像（イマジンド）でもなく複数調査地（マルチサイティッド）でもないディアスポラ研究について」、伊豫谷登士翁編、『移動から場所を問う-現代移民研究の課題』、有信堂、27-49。
- 広田康生、2010、「地域社会の「多文化・多民族化」-「トランスナショナリズムと場所」研究から」、渡戸一郎・井沢泰樹編、『多民族化社会・日本-〈多文化共生〉の社会的リアリティを問い直す』、明石書店、147-165。
- 飯笹佐代子、2013、「「多文化共生」という無難な安全地帯」、伊豫谷登士翁編、『移動という経験-日本における「移民」研究の課題-』、有信堂、185-209。
- 石川真作・渋谷努・山本須美子編、2012、『周縁から照射する EU 社会-移民・マイノリティとシティズンシップの人類学-』、世界思想社。
- 伊豫谷登士翁編、2007、『移動から場所を問う-現代移民研究の課題』、有信堂。

- 伊豫谷登士翁、2013、「「移民研究」の課題とは何か」、伊豫谷登士翁編、『移動という経験-日本における「移民」研究の課題-』、有信堂、3-25。
- ノールズ ヴァレリー、2014、『カナダ移民史-多民族社会の形成-』、細川道久訳、明石書店。
- 栗田和明、2018、『移動と移民-複数社会を結ぶ人びとの動態-』、昭和堂。
- キムリッカ ウィル、2012、『土着語の政治-ナショナリズム・多文化主義・シティズンシップ-』、岡崎（つくりの大は立）晴輝・施光恒・竹島博之監訳、法政大学出版局。
- 森本豊富、2008、「日本における移民研究の動向と展望-『移住研究』と『移民研究年報』の分析を中心に-」、『移民研究年報』14: 23-45。
- 森本豊富・森茂岳雄、2018、「「移民」を研究すること、学ぶこと」、日本移民学会編、『日本人と海外移住-移民の歴史・現状・展望-』、明石書店、13-30。
- 白川俊介、2012、『ナショナリズムの力-多文化共生世界の構想-』、勁草書房。
- 太田好信、2012、『政治的アイデンティティの人類学-21世紀の権力変容と民主化にむけて』、昭和堂。
- 竹沢泰子、2011、「移民研究から多文化共生を考える」、日本移民学会編、『移民研究と多文化共生』、御茶の水書房、1-17。
- アーリ ジョン、2015、『モビリティーズ-移動の社会学-』、吉原直樹・伊藤嘉高訳、作品社。
- ウィンチェスター マーク、2013、「移民と先住民のあいだ」、伊豫谷登士翁編、『移動という経験-日本における「移民」研究の課題-』、有信堂、137-162。

東京外国語大学南アジア研究リサーチペーパーシリーズは、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト南アジア地域研究推進事業の出版物です。

人間文化研究機構 (NIHU) <http://www.nihu.jp/ja/research/suishin#network-chiiki>

NIHU プログラム 南アジア地域研究 (INDAS) <http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/>

東京外国語大学拠点 南アジア研究センター (FINDAS) <http://www.tufts.ac.jp/ts/society/findas/>

東京外国語大学南アジア研究リサーチペーパー 7
多文化社会における移民の文化実践とモビリティ
— トロント近郊パンジャブ移民の事例より —

東 聖子

2019年3月1日発行 非売品

発行 東京外国語大学拠点 南アジア研究センター

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学 研究講義棟 700号室 南アジア研究センター

TEL: 042-330-5222

<http://www.tufts.ac.jp/ts/society/findas/>

印刷 株式会社 美巧社 東京支社

〒170-0003 東京都豊島区駒込 1-35-4 グローリア駒込 2F

TEL: 03-6912-2255

ISSN 2432-437X

